西南役の三重市の戦闘

薩軍来たる

土生　よねさく

三重市の戦争

◇薩軍来る。

明治十年五月十二日。午後六時、薩軍の先鋒四ケ中隊四〇〇名（第三、第四、第八、第九）が重岡に殺到し、続いて後続部隊の四ケ中隊（第二、第十、第十一、第十三）も続々として部落に入つた。

重岡警察隊の三十余名は、分散して急を大分県庁に連絡した—三重市に薩軍来る—の報が市場に入つたのは夜中であつた。市内は騒然となつた。大事な物をとりまとめ或は地下に埋めるなどして、早朝から久知良、内田、広瀬、松尾方面の知人をたよつて避難をはじめた。筆者よねさくの一家は奥内田の角谷家に避難したのであつた。

然るに薩軍は十三日午前三時重岡を発して、急行十三里を突破した午後五時竹田に侵入した。

仝日（五月十三日）薩軍数名は三重市に来て、『明十三日、西郷軍はこの地を通り大分に向ふから、湯茶、人馬の用意をなすべし』と告げて去つたがその夜になつても遂に薩軍は入来しなかつた。これは大分方面にある官軍に足どめさせる謀略であつたようだ。

五月十八日薩軍数名が三重市の用務所（泉原多田安次郎方）に来たが、役人たちは大分の官軍に連絡のため出た後であつたので、市内各戸主を集めて—西郷先生に味方せよ—と大に説得すると共に、軍用金を徴収されたので、要永の内入金として金三千円を差し出した。

◇官軍の本隊が熊本より迫る

熊本城を包囲していた薩軍が敗退すると、官軍の大部隊は阿蘇より急行玉来に到着した（五月二十日）中川神社一帯に集結が終ると、後方一帯の山上に砲兵陣地をとり、竹田市内にある薩軍に対し、連日砲げきをした

◇薩軍竹田より敗退

五月二十九日官軍の砲火による火災と、薩軍の放火の為に竹田市街は大火となつた。薩軍は隊伍も組まず、三三五五脱出して緒方、牧口を通つて宇田枝の寺で隊を整へ奥畑から小野市に退却した（一枝隊は中津牟礼に宿泊した。）追げきして来た官軍は宇田枝で止り引上げた。

◇官年の枝隊正竜寺に宿泊

薩軍が竹田を放棄した五月二十九日に、官軍の遊げき隊（二五〇名隊長村田成礼大尉）は、山奥、深野から正竜寺に入つて宿営した。地方人を使つて敵情を探ると薩軍近し—とわかつたので、翌三十日未明山奥、深野に後退した。

その直後、薩軍に加入した竹田報国隊（一五〇名）と石塚八番隊が中津牟礼から久原を通り市場市内に入ると抜刀して正竜寺に突入して来た。然し役人、有志は深野に避難した後であつた。

威風堂々たる住職西方円精が、抜刀の薩摩隼人たちを尻目にかけ『土足で仏殿を汚すことも西郷先生の教訓か』と叱りつけたと伝えられるのはこの時の逸話である。

その日の午後薩軍は力ぬけの体で、引返しの途中松谷で本隊よりの連絡員に会い、又三重市に入つた。この日の情報で、村田隊が弱体であることを知つたのである。

薩軍の本隊は小野市で隊長会を開いた。（午前九時）

「三重市ノ地タル一度失セバ後ウルコト難キノミナラズ、延岡亦保チ難カランヶ今直ニ軍オ進メ此ノ敗辱オ雪ガントス。敵若シ先鞭シ三重市オ占メ、三国、旗返ノ嶮ニヨラバ、千悔何ゾ及バンヤ、速ニ彼ノ地ニ至リ而シテ後、方略オ議セン。』衆議一決（薩南血涙史）

◇薩軍の本隊三重に入る

小野市に集結していた薩軍の本隊は、午後一時に出発して三重に向かつた。当時は谷より登り、峠の尾根伝いの細道で、一列でなくては通行は出来なかつた。この三国越を二〇〇〇に近い部隊が通るので非常に時間を要した。三重に先着していた石塚八番隊、報国隊は、通路の要点に監視兵を配置して、交通を遮断してあつたから、薩軍が三重市に入つた事を市民は知らなかつた。

薩軍の陣容

本隊

隊長　伊東直二

部隊　重久二番隊、佐藤三番隊、水間七番隊、石塚八番隊、大迫八番隊、竹田報国隊、中津隊（隊長増田宗太郎）

◇官軍の陣容

一本隊は、合川村宇田枝に集結していたが、五月三十一日午前一時青山少佐が先発した逐次、三重市に進げきする。

司令官　川上操六（後日参謀総長）指揮官青山少佐

部　隊　熊本鎮台歩兵第十四連隊第三大隊、萩原警視隊一番隊と四番隊、工兵隊、砲兵隊

守備隊　萩原警視隊二番隊、三番隊この隊は奥畑に止りて三国、旗返しを守つて、三重市進撃隊の背後を安全にする。

遊撃隊　隊長　奥少佐（後日元帥）

この隊は竹田より宇田枝に転進して三重市作戦について打合をなし大野川の左岸伝いに向野から夜中深野に到着した（向野より先、深野迄の進路は不明

遊撃隊村田枝隊について

この隊長村田成礼大尉（小倉枝隊）の一ケ中隊は五月二十四五日頃大分から到着した。山奥に本部を置き、部隊は深野部落に経営した、仝二十九日市場正竜寺に進出宿営したが、薩軍の近いことを知り、三十日早朝深野に引上げて、奥少佐隊の到着を待つていたのである。

◇両軍の作戦

一、官軍の作戦

1　本隊は宇田枝より牧口―岩戸―玉田―から市場に進げきする（青山小佐先鋒）

2　枝隊（隊長不明）は宇田枝―中津牟礼―白山道―山田から市場に入る。

3　奥遊撃隊は左翼（村田大尉）中央（阿川少尉）右翼（不明）の三道から三重市に進撃るす右のように官軍は敵軍を挟撃の作戦であつた。

二　薩軍の作戦

一、本隊は兵を市街内に伏せて官軍を誘ひよせて市街内にて白兵戦にもちこむ

1　枝隊官軍は岩戸、白山方面より侵入すると想定して、玉田、深田川辺、十文を守護する（山口五番隊、水間七番隊）

2　大分方面よりの官軍（奥遊撃隊に対して権現堂、芦刈、大辻山の一線で守備する（隊名不詳）

各枝隊は死斗することなく、後退して漸次三重市の市街に官軍を導入して白兵戦によつて勝敗を決する。

◇三重市の戦斗

一、官軍の進発

五月三十一日午前三時、村田大尉の率いる小倉枝隊は、深野部落を発し、世次原（宮尾入口トンネル上の原野）にて兵を三分した。

左翼村田大尉は主力遊げき隊歩兵一中隊（一〇〇名）を率い青木吉弥太（臼杵出身・百枝牟礼村戸長）を案内として、大分街道より三重市に進げきした。中央隊阿川少尉は兵六〇を率い小野良平（犬飼戸長・後三重郵便局長）を案内として、金田―芦刈―下田方面に向う間道を前進した。

右翼隊（指揮者不明）は兵五〇を率いて、赤嶺左右平（下赤出身後の三重村長）を案内として、塔の辻―又井―牟礼―下田に通ずる小径を前進した。

二、左翼隊の敗戦

官軍村田隊は権現堂の松林中に薩軍の伏兵を発見して、射げきを開始したが、敵兵は応ぜず後退して三重市市街に入つた。

村田隊の一枝隊は之れを追うて、下赤より重政に上り市場東端の敵に射げきを与えた。薩軍の本隊は市場市街内にかくれて射げきを避け官軍を引きつけて白兵戦によつて勝利をえようと機会到来を待つてい

たのである。

夜は未だ明けていなかつた。官軍が軍政に上ると、薩軍（重久二・大迫九）は、久知良より重政に急行して官軍の背後に迫つたので、重政より下つた。時丁度村田隊は市場入口（五区あたり）と石塚八と戦つて形勢有利であつた。この本隊に合したので、薩州危しと見えた。重久二・大迫九は重政より官軍の側面に射げきを加え、更に市街にいた各隊が一斉に攻げきを加えたので、形勢逆転し、村田隊は漸次後退して下田に移り、大原の丘上に移動せねばならなくなつた。

阿川中央隊は、金田、芦刈にて少数の薩軍を破り追げきしつつ大原に来た。この時玉田方面に居た薩軍佐藤三番隊が、白刃を振つて迫つたので、下田堤（少年院下）に押されて村田隊に出合つたから、大原に移動しようとする本隊と、大原より下つて来た阿川隊とが、互にぶつ突かつて混乱を生じた。

官軍は、重政よりの激しいそ撃と、大原からの佐藤三番隊の切込みに挾み討たれ、退路は竜ケ鼻の崖下を通り弁天に出る以外には退路がなくなつた。

全く死地に追いこまれたのである。これ迄市場市街に鳴りをひそめて戦機の熟するのを待つていた、薩軍の本隊は、臼杵街道（現五区・六区）及駅うら一帯に散兵して、退却する官軍に猛射をあびせた。官軍の後尾は、佐藤三番隊の白刃に切り込まれて大惨敗を受けたのである。

弁天の崖下に於いて、死地を脱した者は、ひた走りに大分街道をにげたのである。

奥少佐は深野にいたが、敗走して帰る友軍、白刃をひつ下げて追げき急な薩軍を前にして、泰然自若として、僅かな手兵を以つて薩軍を射げきせしめつつ、友軍の敗走を助けたので、薩兵は深野から引き返した。官軍は敗走又敗走、戸次で兵をまとめたのであつた。

三、右翼隊の敗戦

兵員五〇のこの部隊は、又井、牟礼、市場へと進げきした。途中木ノ本の保塁（兵二〇）占領に手まどつた為に、重要な時を失つたことも官軍の不利であつた右翼隊が牟礼の松林にさしかかつた時、官軍の惨敗の報をうけたので退却を開始した。

薩軍は猛然と反げきに出た。見る見る官軍は六七名切り捨てられ、西原方面に潰走した。大野川を渡つて柴原より、深野に出て、戸次ににげた。この大野川渡渉中に、二名狙げきされて死亡した。

四　玉田方面の敗戦

五月三十一日午前一時、官軍の先鋒青山少佐の部隊は、宇田枝を発して、同六時に岩戸に到着した。がそのころ三重方面に銃声が盛んであつた。これは「奥軍の攻げきであろう」と、玉田、深田に入つた。まもなく銃声も止んだが、よもや官軍敗北とは思わなかつたらし

い。

薩軍（水間七番隊・山口五番隊）は十文字原（羽飛区）一帯に兵を伏せて官軍の到来を待つている。その青山少佐の部隊がうつかりと深入をして来た。突如として十文字原から薩軍抜刀隊が切り込んだ。官軍は隊を乱して中玉田ににげた。その折、下玉田よりも薩軍が進げきしてきたので官軍は混乱苦戦をしていたが、折よく警視隊の応援があつて、大なる損傷もなく、岩戸に退き、川を挾んで戦つたが当時は橋がなかつたので共に防戦に都合がよかつた。

官軍は隊を整えて牧口に退いて本隊に合した。薩軍は雨堤迄追げきしたが、官軍の本隊が近い事を知つて、岩戸に引き上げた。ここには官軍の朝食がそのまま残してあつたので、十分に腹をこしらえ、酒場（羽田野清方）に入つて痛飲し更に猛宗竹の節をぬいて酒をつめ、或はやかんに充して、人夫を徴発して担がせ、引上げに際し民家八戸に火をつけて立ち去つた。酒は三国峠に送つたが、その人夫たちは遂に帰つて来なかつたと言う。（羽田野清氏談）

官軍の一部隊（一〇〇名）は宇田枝―伏野―中津―牟礼―久原を通り正午頃山田の庵寺に到着した時、岩戸方面から、三三五五の薩兵が玉田を通過するのが見えた。そこで官軍の不利を察して、再び宇田枝に引上た。

△正龍寺で隊長会議

官軍を追げきした各部隊の集結が終ると、軍規粛正について兵を戒めて解散休養を与えた。（午前中）

隊長等は正竜寺本堂で合議を開いた。三国峠の死守説が出たが、これは受身となつて不利であると結論された。竹田恢復説は、官軍の挾げきを受ける。結局、官軍の虚を突くために臼杵を攻略し、次いで大分に進出することに一決した。

その夜（五月三十一日）市場市街に―竹田に出げき―と流説し、岩戸方面に松明（たいまつ）の移動擬装などして、官軍の追げきを封じた。

いよいよ臼杵に出げきするに当り、隊長伊東直二は次のように声明した。

『この挙や、深く敵地に入る所謂死地なるもの、臼杵を取るに有ずんば復た生路なし、想うに敵兵必ず我を挾げきせん。前軍敵を受くるも後軍応ぜず、後軍戦いを交うるも前軍之を顧みず唯勇往邁進すべし。』（薩南血涙史）

軍の編成は次の通りであつた

一前軍＝佐藤三、永井四、水間七、竹田報国隊

二中軍＝重久二、山口五、大迫九、大小荷駄

三殿軍＝石塚八

出動後十二時。巧妙に、静粛に脱出するが如く行われたので市民は

少しも知らなかつた。翌朝六時には臼杵の二里手前に達し、直に攻げき態勢に入つたのである。

官軍の奥少佐隊は戸次より大分に入りて薩軍の警戒に備えていた。宇田枝にいた官軍警視隊は二日午前一時出げき、午前三時三重に入つたが一兵もなく啞然としたと言う。

三十一日の午後、休養を与えられた薩軍の状況については戦争余談の項にて参照されたい。

△薩軍ふたたび侵入

六月十日、臼杵から退却した薩軍は、切畑に集つて隊長会議を開いて、今後の行動について協議した。

『今や官軍は臼杵に集る。三重市必ず空虚ならむ。たとえ官軍之を守るも、該地攻むるに利ありて守るに利あらず。夜に乗じて之を抜き直に竹田を恢復せん。この事を旗返、三国に告げ、翌十一日正午に各隊相次いで切畑を出発した同日午後五時鶯谷から侵入した松尾、内田に進んだ時（地点不明）その先頭が不意に現われた官軍から斬られた。（石塚八番隊分隊長平井政徳）そこで侵入を中止して、あたりの山や丘に分散して市場の方を見ると、夥しい人影が走りまわるのが見えるし、市民も小高い地や屋根の上にあつて観戦しようとしている。薩軍は『官軍の警備己に備われり』と判断して、再度の侵入を中止して、夜にまぎれて小野市に退いた。（内田より小野市への退路不明）

当時三重市には、糧食、弾薬を正龍寺等に集めてあつたのでこの責任者柳川某は、これを敵に奪われてはならぬ。と軍夫（二万と記録あり）を非常召集して、牧口に移送を開始していたのである。

征西戦記稿には、―六月十一日林少佐一大隊を率い臼杵より三重に転す―とあるから、切畑の薩軍が、再度三重に侵入するかも知れないと窒したのであろう。けだし柳川軍吏のあわてぶりから考えると、林大隊は夜に入つて到着したのであろう。

この薩軍侵入の時、負傷した人物を、分隊長平井政徳としたのは、次の血涙史の記録によつて推定したのである。

『六月十一日午前十二時、三重市進撃の薩軍は、前夜切畑を発し、途に滞陣して一定の時期を待ち、午後五時、三重市に着し、兵を部署して鶯谷口より進撃せしに、官軍の守備己に備わり、険に拠りこれを拒ぐ、薩軍その利なきを見、夜兵を収めて小野市に退けり。この戦いに八番石塚隊分隊長平井政徳負傷せり。』

この三重市の戦斗で、村田隊長、阿部井少尉、兵三十一が戦死を遂げ、梅沢少尉補以下十二名の重傷者を出した。

この戦死者は殆んど、首を切り落されてあつたと言う。尚、村田隊長と阿部少尉の首は竹にさして路傍にさらしてあつたことは、薩州隼人等の汚点と言うべきである。

右翼隊は牟礼の松原にて、隊長外七名が倒れ、西原より渡河中二名

死亡、計九名の戦死があつた由（当時の生存者神田某の談）

薩軍は重久隊、其他四名、計八名と血涙史にあるが確実な数とは言えまい。

薩軍の石塚隊は銃器六〇丁、弾薬三箱、其他の隊にて銃器八丁、弾薬若干の戦利品をえたりと記録されてあるが、これも薩州側の記録である。

△薩南血涙史の記録

前略

薩軍に在つては、前日小野市より進軍し、胸壁未だ整はざるに午前五時、官軍兵を分ちて、一つは竹田街道より、一つは臼杵街道より逼りし敵は、報国隊の哨兵を取りて市坊に入る。市坊騒擾して敗れんとす石塚隊（八番）其の急を見、進みて町口に戦う。既にして二番（重久）九番（大迫）三番（佐藤）等の諸隊応援してこれを横撃す。石塚隊機を見て直に斬入して大に官軍を済り、追撃二里に至る。石塚隊は長七連銃五十挺、針打銃十挺、弾丸三個箱を得、大迫隊は針打銃八挺弾丸若干を獲す其他の諸隊亦若干を獲たり。また竹田街道より来りし官軍は水間隊（七番）山口隊（五番）の二中隊これに当り、また斬入これをり、追撃約一里余岩戸に至りて其の本営を斬りこれを火せり。此方面も亦銃器弾薬を獲ること多くして各隊三重市に凱陣す。此戦い両方面を合して官軍の死屍は十を見る。薩軍の死傷二番隊（重久）の死傷四名、各隊を合して僅々八名におよべり。官軍の奥隊の村田大尉安部井少尉以下戦死三十一名、竹田街道の死傷未詳

此日、伊東は諸隊を会し進軍の方略を議す。或は曰く未だ隊状を得す暫く三国峠の麓に退き敵の動静を待つべし、或は曰く直に進みて竹田を恢復せんと。ここに於て衆議こう然として決せず。伊東、石井声を斉うして曰く『この地素より兵を駐むべき地にあらず、然れども今俄に退却せば敵必ずこれに乗ぜん。且つ竹田は我軍大敗の後なるを以つて、民心危疑これを攻撃するも、恐らくはその利なからん寧ろ臼杵に向いその虚を衝き、進みて大分を攻撃するに賛成し終に臼杵に向うに決したり

三　国　峠　の　攻　防

◇明治十年五月三十一夜明頃に行われた市場の戦いに大勝した薩軍は竹田に進げきすると声明して、肥火（たえまつ）隊を岩戸方面に移動させた。これは牧口、宇田枝方面に官軍が進駐していたから、これをけんせいする手段であつたのである。

◇仝年六月一日午前六時、薩軍が臼杵を占領し、臼杵にて大敗し切畑から三国、小野市に退却する足どりを略記して置きたい。

◇六月一日、臼杵軍を破つて九日迄滞在した。八日から官軍の包囲攻げきを受け、海上からは日進、孟春、浅間の艦砲射げきを受けた。弾薬

も食糧も欠乏したので津久見方面に逐次脱退を開始した。

六月十日午前七時から、官軍の総攻げきを受けはじめたので全軍臼杵から退却した。津久見に到着して、それから佐伯に進げきし、延岡に入ろうとしたが海上より浅間艦の砲げきをうけて退却が困難となつたので、佐伯入を中止して切畑に入つて宿泊した。

◇六月十一日、薩軍は切畑に三ケ中隊を残して官軍に備え、全軍は午前〇時切畑を出発し、小半山部、鷲谷を通つて小野市に退却した。この日、豊後侵入軍の隊長伊東直二は延岡に帰つた。延岡には西郷隆盛が居たのである。薩軍の出所進退について協議したり戦況の報告をしたのであろう?。

六月十一日午後五時、薩軍石塚八番隊は、鷲谷より松尾、内田に進出して、官軍の状況を偵察中分隊長平井政徳が斬られたので分隊を解散して官軍の情勢を視て『官軍すでに守備完了』と見て全部隊小野市に入つた（退路不明）

◇六月十二日、薩軍は次のように配置して守勢をとつたのである

旗返　米良一番隊、清水十三番隊

中間　石川十八番隊

三国　市来十五番隊

これに対し官軍は、久部村民佐保初治と巡査堀江与三郎をして敵状偵察をさせ、次のように兵を配置し、両軍相対峙した。

梅津、葛葉に　萩原警部隊

旗返に　福原　大尉

三国　青山　少佐

援隊　林　少佐

◇六月十三日夕刻、本城山、神明峠（山中）の官軍守備隊が、薩軍から襲げきを受けたが、日暮であつたので、その発見も早く難なくげき退した。

◇六月十四日、牧口に居た指揮官川上操六少佐は、新に攻げきの部署を定め、三道一斉に攻げき開始を命じた。全線に小さい衝突があつたが官軍（農兵）は薩軍の手ごわい切込の味を知つているので自重して戦果をあげる為にあせらなかつた。警視隊（剣道のすぐれた浪人部隊）は梅津方面より敵の右を突き或は背後を脅したりして大に敵を悩した。この為に、石川第十八番長は負傷して延岡に後退する重傷をうけた。

◇六月十五日、青山少佐の隊は午前四時から三国、旗返の正面から攻めた。峠の正面にそそり立つ大嶺峠と七廻越の両道から攻めて鏡山を攻略したので、ここに胸壁を築いた。峠の連山とは僅々五〇〇米位であるので、ここから大砲をうつて旗返の塁をげき破した。

各隊も夜となく昼となく探り射ちをしたが、敵塁は要害堅固の天嶮と新緑の中に沈黙を守り続けて、遂に応戦しなかつた。

この日の情況について、薩軍側が残した血涙史は次のように記録している。―官軍側の攻げきは日夜間断なかりしが前夜に至り官軍間然として銃声を発せず、石川隊それを怪しみ、発砲して敵状を探らんとするに、其弾薬乏しきを以つて、之を本営に乞ひしも、本営亦弾薬乏しくて之を給する能わず。時に隊士鬼塚綱義潜に敵塁を偵察し帰り、報じて曰く『余敵塁を窺ふに、守兵甚だ寡なり。而して兵士或は雑談に耽り、或は平臥を貪り、復た之が備を為さず。今暗に乗じて之を襲はば必ず奇勝を奏せん』小隊長山口城軌肯んぜずして曰く『我隊終日激戦、兵士甚だ疲労し、且つ弾薬乏しく、余未だ勝算を知らず』と以つて薩軍がどんなに苦労していたか、また弾薬が極度に欠乏していたかを知ることが出来る。若し策があるとしたら、鬼塚隊士の言の様に、白刃を振つて切込むより外に手はなかつたであろう。

◇六月十六日三国、旗返、梅津の大連峰は官軍にとつては難攻不落の堅塁であつた。だから五月三十日以来官軍の行動は少しも進展しなかつた。そこで牧口に居た川上少佐（名操六、後の参謀総長）は、この膠着状態を打開する為に、司令部を奥畑の谷に進め、正に―明十七日午前二時を以つて三面から総攻撃を強行する―と令を下した

右翼隊は旗返方面より―福原大尉

中央隊は峠の正面より―林大尉

左翼隊は峠に向つて左―青山少佐

中央から進げきする林隊は、三国峠の天嶮の塁を正面より攻げきする任務を希んでいた。最も労多く死傷も亦大である事を覚悟せねばならぬ羽目に立つていた。この対策の結果―決死隊を組織して夜襲を強行し、敵の動揺の虚を突いて総攻げきを敢行する―と言う事に一決した。この決死隊員募集の声に応じてこの重責を買つて出た者は多数であつたが佐竹中尉の部下河野辺常松軍曹外十六名の勇士を選抜した。この十七名は銃槍に優れた者であつたと言う。

◇六月十七日、峠の死闘

林隊の決死隊員十七名は、十七日〇時半軽装で、奥畑から峠に至る間道を伝つて山腹をはい登つた。全身を耳にし、せきばらいを禁じ、一歩一歩、三国の第一塁によじ登つた。

予定の午前二時、決死隊は敵に発見さるることなく頂上に達した丁度その時、薩軍の哨兵は夜襲と知りあわてて発砲して友兵に急を知らせたのである。この不用意の塁に、天兵の降るが様に躍り込み瞬く間に十一名を突き伏せた。決死隊には死者はなかつた。

林隊も山麓に集結して、静に山腹をよじ登つていた。約束の午前二時、突如銃声一発、三国の第一塁に死闘の叫びが起つた林隊先づ猛然とかんせいを上げ進げきに移つた。怒濤のような咸声と共にラッパはりゆうりようとひびき渡つた。林隊の活動に応じて、青山隊

は三国の二塁、三塁、四塁えと進げきし、右翼の福原隊も亦、午前二を期して旗返の諸塁に突入した。前面に激戦が展開されているのに背面からも官軍の進軍ラッパが迫るので、上津小野（字目）に通ずる道路に官軍が廻つたと薩軍は誤認したので、暗夜溪谷を伝い、道のない急斜面をころびつ起きつあわてつつ上津小野に出た。三国連峰に点在した諸塁の薩軍も同様に敗退した。

川上司令官の率いた官軍は、難攻不落と称せられた天嶮三国峠一帯の拠点をことごとく占領して、未明の峠越や、奥畑より上津小野えの道をたどつて午前七時小野市に到着して兵馬を休めた。梅津越の萩原警視隊も、途中の残敵を払ひつつ小野市に到着した。記録に曰く—この日塁十ケ所を抜き、行程五里小野市に入る。—と。

峠の攻防余談

◇殊勲の決死隊

川野辺軍曹と外十六名は、七月九日重岡に於て、殊勲者として光栄かがやく表彰を受けた。この数日前の七月五日には、最高司令官谷干城少将、児玉源太郎少佐等官軍の将星が重岡に到着していたから、この式に列したことであろう。

金拾五円　軍曹　川野辺常松
金拾五円　伍長　内藤　角平
金拾五円　伍長　朝見　平太
金拾円　兵卒　永田　亀八
仝　仝　赤星　恒长
仝　仝　温辺加代五郎
仝　仝　千代田音蔵
仝　仝　末松市之助
仝　仝　下津浜休太郎
仝　仝　米永　直助
仝　仝　木崎弥一郎
仝　仝　原　七蔵
仝　仝　内村　皆吉
仝　仝　高戸勝三郎
仝　仝　中村　皆吉
仝　仝　酒井　順平
仝　仝　田端多次郎

◇悲劇の隼人

三国峠の血戦で戦死した薩軍の十一名は、全員飫肥の藩士であつた戦死は全滅といい、十一名、十二名等異説があるが血涙史の四名生還遊説を眞としたのである。

戦いがすむと、峠の戦死者の遺族たちは四人の生還者たちから、峠

の死闘血戦の情況を聞いた。遺族たちは打ちつれて峠に近い片内部落を尋ねて来た。その夜は部落の人たちの温情に抱かれつつ、戦ひの様子を聞いたり、一家の支柱を失つた悲しみを語つたりして、浅い眠りに一夜をすごした。

その翌日、遺族たちは村人に案内されて仮埋葬地（第一墓）より骨を拾ひ、金一封を御礼として部落に呈して去つた。（片内古老談）

片内部落の人たちは、深くあわれを感じ、仮埋葬であつた第一墓趾に石碑を立て、戦死者の名を台石に刻んだ、その翌年の命日に墓前祭を行つたのであるところが意外な事が起つた。それは—この第一墓趾は白山村奥畑区内であるのに、何故無断で墓標を立てたり祭りを行ふか—と言うのである。片内側は『事面倒なり』と思つて、部隊長山田宗賢を戦死者代表として因尾村側に墓標を立てかえたのである。

西南戦趾の前でバスを捨て峠に上り切ると、道は左右に分れる。右は第一墓趾で左は眺望台への道である。この左道を数歩上ると杉木立の蔭に墓がある

正面に　山田宗賢墓

左面に　信心施主　片内村中

背面に　安達彦治、安達新十郎　片山百五郎

右面に　明治十二年五月七日

片内の古老曰く、あの戦ひ当時奥畑側は始終官軍側にあつたし片内は峠の連峰中にあるので止むなく薩軍側になびいた。更に薩軍の戦没者遺族から金一封を受け、仏祭まで依頼されていたから、自然対立するようになつた……と語つた。さもあろうと私はこたえた。

さて本論に入らなければならぬ。今、峠の石祠に十一名の戦死者の芳名が連ねてあるが、之れは飫肥から遠路わざわざ納骨に来られた遺族によつて確認された氏名と数である。それに血涙史が生還四名と認めてあるので第一墓守備兵は十五名であつたと推断した。第二、第三第四も十五名づつであつたろう。薩軍の守備隊にあつた墓はどこも十五名づつであつたろうと考えるのである。

由来日本人は一〇、一五、二〇等の数姿で物を計つたり、配置する風習があると考えられる。峠に憤死した隼人十一人の芳名は次の通りである。

分隊長　山田宗賢

隊　員　谷口茂三郎　塚田源三郎　油地清枝　蛯原恒二郎　高橋藤

被　久保田久吉　宮浦藤平　河野定家　井野三九郎　杉本庵

◇大西郷農兵の勇武を嘆賞す

西南役直前のことである。一日西郷は、その左右の人に語つて曰く「天下兵と名づくべきもの、只近衛の一隊あるのみ。鎮台兵の如きは、鋤鍬を手にする農民なれば、一発の砲声におどろきて遁げ去るならん」と左右の人たちに話したという。

当時この鎮台兵は、農民の二三男で兵役を志望した者で組織したので、世人から―百姓兵とか、ドン五里兵などの悪口雑言でひやかされた―一発ドーンと砲声がしたら、五里にげるだろうと笑つたのであるところが薩州隼人の侍兵隊は、熊本城を猛攻五十日に及んだが、遂に抜くことが出来なかつた。肥後でも豊後でも至る処で破れ、追いまわされ、あげくの果に鹿児島に逐ひこめられてしまつた。

一日大西郷曰く―「あゝ吾過てり、想わざりき、鎮台兵のかく迄に強勇にして、我を困らしむるに足らむとは、是れ日本全国を挙げて兵として不可なきを証するもの、何の喜びか之れに若かん」と。―西郷は満面笑を含みて満足そうに喜んだ―と伝えられた。

農兵を嘆賞し、日本将来の為に喜んだとは、さすがに大西郷の偉大さが現われている。

◇薩州三発の令

薩軍は初めから銃丸の不足を心配していたらしい。正に鹿児島を出発しようとする時、大西郷は令を三軍に伝へた。「毎戦一人三発を終らば、直に抜刀以つて敵陣に切り込むべし」と。

薩摩隼人の豪気、勇敢は、この言によつて盛々死を超越して戦つたのであろう。

◇薩州の軍票

薩軍は桐野利秋の方案に依り佐土原において、新に紙幣を発行することになつた。当時本宮付中馬甚七が紙幣製造係を命ぜられた。かつて贋造の罪に由つて入獄中なりし友野某なる者の罰を釈し、之れをして製造に当らしめ、左記の六種を発行した。

十円	濃茶	三、六〇〇枚	二六、〇〇〇円
五円	ブドウ	一六、〇〇〇枚	五八、〇〇〇円
一円	勝色	三〇、〇〇〇枚	三〇、六〇〇〇円
五十銭	桃色	三〇、〇〇〇枚	一三、八〇〇〇円
二十銭	黄色	一〇、〇〇〇枚	三、二〇〇〇円
拾銭	生壁	九、〇〇〇枚	九〇〇〇円
以上	六種	九三、〇〇〇枚	一四二、〇〇〇円

（西南戦史川崎柴山）

◇十長、二十長のこと

薩軍は糧食も弾薬も、総べての軍需品に大欠乏で苦しんだ。之れに反して官軍は物資も弾薬も豊であり、兵も続々として全国から集つた三国の攻防戦では、軍需品は三重の正竜寺に集積してあつた。之れを戦陣に輸送するのには民間人のを起用した。この人夫は十人又は二十人を一組としたが、この十人の長を十長といい、二十人の長を二十長といつた。この輸送人夫には案内をつけたので、円滑に物資が戦陣に

配布されたという。

伏野公民館長の曽祖父に、江藤市郎太という人物があつた。明治十年三月二十七日付で因尾戸長に任命（大分県より）されその数日後に―糧食課百長に申付候事―の辞令を受けたことが本人の履歴書に残つている。即ち―百人の人夫の長―となつて正竜寺の糧食課本部から物資を戦線に輸送する大任を背負つたのである。

尚余談であるが、この江藤市郎太氏は、三重市場附近戦死兵卒の見分方を嘱託されているがその発令者が青山少佐になつている。この少佐は、三国攻めの左翼（因尾側）より進げきした部隊長である。

◇軍隊給料請求書

昭和三十年の夏日、岡本病院が、ふすまの張替をしたら、遇然にその下張から、首題の請求書が現われた。

歎　願

大野郡第五区九小区田原村　菅原　佐市

右者、先般賊徒追撃之節、名古屋鎮台第六連隊第三大隊第一中隊兵卒並人夫三十二名、六月廿一日、御宿沿仕候処、御進撃之際付、宿証御下渡無御座、依之並方之通宿料御渡被下度、此段奉願候也

右　願　主　　菅原　佐市

明治十年九月十五日

（宛名は書いてない）

この請求書は四十五通あつたが、全部宿泊料請求の歎願書であつた文面から見ると、請求書の住所姓名、軍隊名、人数、宿泊日数等、文章も同一であり、用紙も、生漉の手刷の罫を使つてあるから、役場が世話したのであろう。

軍隊名と宿泊地から分類すると、熊本鎮台分が二十二通で小野市側に分宿しており、他の二十三通は名古屋鎮台分で木浦鉱山村に宿泊したのが十四通。田原が九通。千束が一通・村名不明（破損）となつている。日附から見ると、宿泊の最も早いのが、峠で血戦の行われた当日の六月十七日で、最後が八月廿八日となつている。峠の決戦直後、最も多く峠を越して、この小野市に宿泊したのは熊本鎮台である。

宿泊した人数から見ると、最も多数が宿泊したのは小野市の矢野秀吉氏の宅で、一五〇名、最も少いのは仝村矢野倉吉氏方の十三名である。隊名から見ると、やはり歩兵が最も多く、輜重、糧食、武庫、別動隊、警備隊、軍夫の順である。西南役当時、小野市、重岡を通過した軍隊は隨分多数であつたろう。

最後にこの請求書の文意の表現を見ると、歎願、御下渡無御座、奉願候也、願主など全く幕政時代の臭いである。これが明治十年頃の世相である。

戦陣余談

◇小野良平氏の戦陣談

計理士小野英雄氏の祖父で三重郵便局長を永く勤められ、西南役当時は犬飼戸長であつた。

五月三十日の三重市の戦闘の当日、わたしは村の遊撃隊の阿川中央隊付であつた。進めとか退けとかの合図の旗振役であつた。

官尾のトンネル上の世次原から、金田、芦刈方面の敵を追いつつ市場方面に進げきした。旗振案内役であつたから武器をもたなかつたので非常に不安であつた。

丁度原山にさしかかつた時に賊が一人弾丸に当つて倒れていた。近づくと目をむいて腰の刀を抜こうとするが、重傷でぬけない。いかにも口惜しそうであつた。然し戦場心理のせいでもあろうか、勇気を振つて賊の刀を拝借した。お蔭で少し力づいた。

かくして賊を追うて下田に出た。村田本隊が高市の方から町口（五区あたり）に迫つていた。わたしは下田堤の後ろ高地に身を伏せて敵弾をさけていた。ところで上の方からも弾丸が来はじめた。続いて抜刀隊も近づいた。

折から下玉田方面から大部隊が霧の中を突進して来た。わたしは友軍右翼隊が援軍に来たと思つた。こちらから旗を振つたら先方も旗を振りつつ進げきして来るので安心して喜んでいたら、それも薩軍であつたので肝がつぶれる程おどろいた。

全く死地に残された。三方からの敵を受けたのである。大部分の友軍は、弁天への小道に流れ込んだが、わたしは大原（豊西高校）に這つたり、伏したり麦のうねの中にかくれたり、それこそ命からがら、にげ続けて深野に逃げこんだ。

この戦いの原山（少年院）高地から来た敵は、中津隊か竹田報国隊らしかつた。それは服装が全くまちまちであつた。鎧を着た者、兜だけの者など、仮装行列そのままであつた。

薩軍もひどい服装であつた。長い侵入戦であつたから、衣類はぼろぼろであつた。中には剣道の防具姿もあつたし、赤褌に赤ざやをぶちこみ、裸体であつたが、かぶと丈は立派なのをつけていた。竹田で徴発したのであろうと思つた。

◇正竜寺と西南役

明治十年五月二十九日、村田遊撃隊（村田成礼大尉、奥少佐の配下）二五〇名は、正竜寺に宿営した。この夜、多くの地方人を間者として敵状を偵察したが、薩軍の近いことを知つて、三十日未明、深野に引上げた。

同五月三十日、村田隊が寺より引上げた直後、薩軍の報国隊（竹田

の士族隊）が抜刀して寺に襲来したが、既に引上げた直後で一兵も残つていなかつたが村田隊の兵力まことに薄弱であることを知つた。午前九時、報国隊一五〇名、砂塚八番隊が寺に到着した。午後一時、小野市発の薩州本隊が続々と寺に到着したが、この情報を官軍は知らなかつた。それは一切の人馬の交通を禁じ、厳重に監視したからである官軍の敗因の一つは薩軍の情況をつかめなかつた事である。

薩州軍は正竜寺を本営とし、総隊長伊東直二を中心に大いに作戦を練つた。兵力と配置は次の通りである。

市場市街内の潜伏部隊

重久二番隊　石　八番隊　佐藤三番隊　大迫九番隊

山口五番隊　竹田報国隊　水間七番隊　中津増田隊

三国、旗返警備隊

米良一番隊　清水十三番隊　市来十五番隊

佐伯口警備隊

嶺崎十一番隊　吉村十番隊

市民は久知良、内田、松尾方面に避難し、市場村役員、有志は深野方面の官軍駐屯地に避難していたので、薩州軍はこれ等の空家を利用して宿泊し、正竜寺に本営の司令を待つていた。筆者の祖父母、母は奥内田角谷氏の家に避難していた。

同年五月三十一日の未明戦に大勝をあげた薩軍は、兵に訓辞と休養を与えて解散した。正竜寺の本営では、伊東直二を中心として、三重市軍議を詣いて一臼杵進撃を決定一して休養に入つた。夜十二時、全軍は臼杵に向けて進発した。当時多少の市民は残留していたが、静粛に軍規正しく出発したので、その進撃を知らなかつたと言う。

この争乱について、正竜寺の過去帳に次のような記入がある文に曰く

「五月三十一日ヨリ八月二十六日迄、官軍入来ニテ当時庫裏等、官軍ニ貸渡已ニ七十五日間ノ宿陣トナル古今未曽有ノ変事、可懼〃〃」

円情筆

古松園主人西方円精の筆蹟にて「雑萃雲集」と名づけた、十二行罫紙三十五枚綴の編年記が残存している。その明治十年の稿に曰く「仝一拾年、西郷隆盛叛逆ス、第五師団熊本城ヲ囲ム鎮台兵ト戦フ、城将谷干城守ス、兵ヲ指揮防禦ス。故ニ城容易ニ陥落セズ有時城兵突然門を開キテ突ゲキ戦斗劇烈なり。死傷甚だ多シ。賊兵敗れて走ル。官軍追激ス。其後数日ヲ経テ賊兵竹田城跡ヲ襲フ。此地ヲ以テ賊の巣窟トス。官軍攻撃シテ火ヲ放ツ。賊軍潰走シテ尽ク当地に来集ス。官軍追撃シテ大ニ戦フ賊軍ノ為ニ官兵ノ死去三十二名アリ。其夜賊兵尽ク臼杵ニ向フ爰ニ放、連日戦フ。賊敗レテ佐伯（切畑）因尾ヲ経テ三国峠ノ頂上に塁ヲ築キ拠テ防禦ス。官軍追撃シテ戦フ。賊敗レテ亦松谷に退去ス。連日戦斗止マズ。

此時ニ当り、当寺堂、庫裏ヲ悉く皆官軍ニ貸シ与フ。臨時病院トナス。負傷兵百五十余名来ル当時ニ於テ死亡セシモノ已ニ五名アリ、惨状見ルニ不忍。後、輜重本部トナル。又タ官軍ノ本官トナルヶ都合六拾余日間ヶ賊将西郷隆盛、鹿児島城山ニテ、官軍ニ包囲セラレ、終ニ自刃ス賊兵勇ク、依テ鎮定ス。万歳ヶヶ万歳三十二才」

◇作戦戦記稿の附録記事

（右ノ中巻第四七の一四頁）六月二十日、熊本鎮台ノ項に曰く是日台兵ハ牙営ヲ小野市ニ移し、会計、輜重、大繃帯所ヲ三重市（正竜寺）ニ転ズ…とある。

◇九十五才が語る西南役

三重町下赤嶺マサ刀自は、（市場五区赤嶺鶴次郎氏の生母）安政六年六月八日生まれで本年（昭和二十一年）は九十五才の高齢である。この老母は次の様に語つた。

『明治十年の西南役の時には丁度妊娠中であつた。田植をしていたら、今の三重林産のあたりでピカピカと薩軍の刀が光るのが見え、鉄砲の音が激しく聞えはじめた。これは危険と墓地の下にかくれていたが、まだ安心が出来ないので、父（伝一つたえ）につられて広瀬の首藤卓美氏（本人は未だ出生してなかつた）方に避難した。

戦争がすんで帰ると戦場見に行つた。弁天の崖下一めんに黒血がにじみ、四十二も死体が転つていた。それがみな官軍であつた。

田植をする時、苗取りに行くと田の中に生首があつたり、あぶらが一面に浮いていた。恐ろしかつたり、気持が悪るかつたりして苗がとれなかつた。

それから、ずつと後（三国戦の後）に、谷干城様が私の母屋に泊つた（赤嶺学一）その時将軍に使つて貰つた蚊帳がまだある』と語つた。

◇七枯骨改葬

三重市の戦斗において、官軍は村田大尉以下三十一名が戦死し、薩軍は重久隊が四名、他を合しても八名位であつた。

当時官軍は重政に、薩軍は正竜寺に仮埋葬したが、後日官軍の分は大分市松栄山に改葬し、薩軍のはその年の秋半の頃、それぞれの遺族が打そろつて枯骨を受取りに来た。

◇杉戸に残る漢詩

昭和三〇年一一月二三日、三重史談会は西南役における村田遊撃隊の遺跡を探る前に深野、山奥を訪ねた。時すでに戦後十年を経て、各戸に残る伝承は消えて調査に得るものがなかつた。僅かに土蔵にからむ一鉄砲倉、食糧倉であつたそうな一位の資料であつた。

三重川に架けられた谷川の橋を渡て、犬飼町の山奥部落を訪ねた。

村田隊は二五〇名と記録に残つているが、深野、山奥の二部落の分宿の兵数について、或は逸話も取材する事が出来なかつた。土蔵にからむ話は深野と同様であつた。

この部落の旧家。佐土原良三氏の住宅の杉戸に、十年役当時の揮毫にかかる漢詩が残つているが、墨色も消えて写しとる事は全く困難であつたが、三重町高寺の故人歩兵中尉佐藤盛雄氏（陸軍中将佐藤要氏の令弟）の調査の結果が、―西南役における豊後方面の戦闘、特に大野郡内の戦斗に就いて―に記録されてあるので、その詩文を転記する

杉戸の漢詩の一

滞雨幽雪夢未回
輝々春色満陽台
一言深伏東方作
姥女喫甘唇如飴

干時明治十年五月下旬、官軍酔堂淳南迂生書

部落の老人の談によると、―この杉戸の書は、この部隊長の筆で、市場の戦斗で戦死された。―この言を真とすれば、酔堂淳甫は村田大尉に落付くようである、

この七言絶句の隣に尚一詩がある。

文に曰く

吾斉々中不尚雀
雀梢不客来不送
客立賓主拝忘座
□無庫不言公事
不論是非果淡々
古今静□山水清
茶好香適幽趣道
倦之交非新而已

明治十年五月　□　軍属緑父天球書斉之文、金花山人書

この詩は斉之文と明記してあるから、軍属緑父天珠は斉氏と同一人物であろう、それを金花山人が書したと見るべきであろう。今にして見れば、良くこそ佐藤中尉が記録してくれてあつた事と敬意を表する

尚、村里の老人の言に、いよいよ三重の市に出撃した時は、今の菅尾トンネルの上の、世継原（よつぎばる）に勢ぞろいして、（隊長の訓辞をうけ、三道に分れて、三重の市に進げきしたと言う。

◇酒代となつたピストル

西南役では、両軍とも軍律が立派で、民家を荒したり、無銭飲食、或は婦女にたわむれる者はなかつたと言ふ。

然し酒屋は例外で、親桶から汲み出して十二分に饗応したと言ふ。泥酔に近く飲むとそのまま土間にねころんだ、当時有田家は今の青波

の場所で造り酒屋であつた。夕刻になると、薩軍は全員正竜寺に引上たその去るに臨んで、隊長らしい人が―金は無いぞ、酒代の代りだ―とピストルを店に投げた。そのピストルは、有田孝氏が大切に保存している。

（よねさくの父有田孫七談）

西南役の進展要録

△四月二八日薩軍の人吉本営は野村忍助に奇兵隊を率いて豊後に突入せよと命令した。

△四月三〇日野村奇兵隊は江代を発し、この日富高に到着した

△五月二日本営を人吉より延岡に移し、野村はここにて指揮をとつた後日西郷、桐野もここに集う。

△五月一二日四ケ中隊の先鋒は午後六時重岡に入る。後続部隊逐次到着、行程九里官軍の巡査隊三十名後退、三重市に薩軍来ると報あり薩軍の布告に曰く明十三日当地通行大分に向う。市民は湯茶、人馬の用意すべし三重市内混乱、避難を開始す。

△五月一三日午前三時、薩軍は重岡を発し、午後五時竹田に浸入、無抵抗占領す、行程十三里竹田士族より成る報国隊は薩軍に加担することに成つた。

△五月一四日薩軍本日竹田に入る。本隊は十三日夜宇田枝に宿営本日竹田に入る。

▽五月一七日竹田報国隊成立。四ケ中隊五〇〇人砲隊二〇〇名今夕正覚寺に勢ぞろいをした。

▽五月一八日藤丸警部、竹田西光寺下にて斬られた。（元重岡駐注）三重市に、竹田より軍用金の徴収に来た。三重用務所（市場一区多田安次郎方）に町内有志あつまり金三千円を要求の内金として渡した。

▽五月二三日犬飼戸長小野良平住民保護申請の為に大分に向う警視隊大分より三重に向う。

▽五月二九日竹田にある薩軍は官軍の総攻撃に破れ、市内に放火潰乱市内大混乱。報国隊は脱落、逃亡多し。

▽五月三〇日官軍村田隊、早朝正竜寺を去り山奥、深野に入るその直後薩軍抜刀、正竜寺に来る。薩軍市内宿営。

▽五月三二日三重地方一帯に、両軍遭遇戦を行ふ官軍惨敗遁走正竜寺にて薩軍隊長会議を行ふ市内宿営。

竜ケ鼻下より弁天に通ずる小路線上にて村田隊長戦死。

▽六月一日薩軍午前六時、臼杵に侵入之を占領す。官軍続々到来、包囲攻撃の体制なる。

▽六月九日官軍の総攻撃大、薩軍臼杵より敗退開始、切畑にて薩軍隊

長会議あり。伊東直二（司令）ここより延岡に去る。兵は鷺谷より小野市に入る。三国旗返の墨を固む。

▽六月一二日官軍三国攻略の体制に入る。

▽六月一三日薩軍、城山、神明を襲う。官軍より撃退された。

▽六月一四日三国連山の攻撃体制

三重市口　青山少佐　林少佐

中津留口　福原大尉

葛葉　口　萩原警部

木浦　口　川北大尉

野津　口　宮崎大尉

▽六月一六日官軍青山少佐は三国、旗返を正面より攻撃す。

▽六月一六日官軍参謀本部を牧口より奥畑に移した。（参謀長川上操六来る）三国攻略の部署決定。

右翼　福原大尉

中央　林　少佐

左翼　青山少佐

三国第一墨に決死隊を送り、午前二時総攻撃を敢行に決す。

決死隊長河野辺軍曹外十六名。

▽六月一七日午前二時決死隊突入、全軍総進撃、三国、旗返の全墨を奪取す。午前七時全軍小野市に入る。

六月一八日官軍榎峠に達す。

▷六月二二日奇兵隊長野村忍助熊田に来て全軍を督励した。

重岡方面の山岳戦続く。

▽七月五日谷少将、児玉源太郎重岡に来る。

▽七月九日三国攻略決死隊員の表彰式が行われた。

▽八月一二日薩軍の西郷、桐野等逐次退却

▽八月一六日豊後口には一人の薩軍なし―と公表された。

峠　路

三重町から三国峠までは十一キロの道のりである。長者伝説で有名な古刹蓮城寺あたりから峠路らしくなる。九折（つづらおり）と言うことばがあるが、そんななまやさしい形容では実相は浮んで来ない。迂余曲折と言うのか、羊腸迂回か、くるり、くるりと五十余の曲りを辿つて峠につくのである。

途中トンネルが一つある。これを過ぎると、かつ然として視界が開ける。バスの左窓には鷺谷の大溪谷があらわれる。点々と人家が林に抱かれた景観を楽しむことが出来る。麦秋の頃も美しいが、紅葉の季節は車を停めずにはいられぬ風光である。

バスは山ひだに入つたり、また張り出た山腹をめぐるのであるが、

右の窓からは覆いかぶさるように山や崖が迫つているので、野の草にも手が届きそうである。だから観光の人たちは、上りは一気にバスの便を借り、下りは緩やかな道を歩くことを楽しんでいる。人を恐れぬ野鳥が近づいたり、野草の一束をもつたり、停んで溪谷を讃嘆している。

三国峠を訪れた人たちは、この羊腸迂回の峠路を歩いた楽しさが最も印象深いとほめているこの地に生れ、この地に育つた者でも、四季折々に思い出したようにこの峠路を歩いている。それは廃道に等しい東海道五十三次をなつかしんで、泊りを重ねて、杖を曳く人が今尚絶えない！と言うその気持に似たものであるかも知れない！と言うその気持に似たものであるかも知れない。騒音のない清明な大気、草にも木にもほこりの無い世界であるからであろう。

◇三　国　峠

三国峠は海抜六六四米で、高さを誇る山ではないが、北九州の秀峰を一望に収めて、景観をほしいままにするのによい足場にある。

峠に立つと、傾・祖母の紫紺の大連峰は、千古を秘めて、大聖の静寂を感ずる。或は眠れる獅子の寛容さとも見えるのである。

この峠を訪うた旅人の言を借りるなら―「日本アルプスから受けるものは、鋭感・狭量・激越等で、断じて近接を許さぬ威厳の山相であるのに、この峠から眺める大風光は円みのある美観であつて、線の太い大人物の温容である。油然と湧き出るしたしみを感ずる。孔子の曰く―浩然の気を養うに足る景観である」と絶讃の辞を借まない。

三国峠とは、藩政のむかし、臼杵・佐伯・岡の三領の境界点が峠に近いところにあつた事からこの名称になつたと伝えられている。

遠く天正十四年の秋、島津の大軍はこの旧峠路を辿つて浸入し、三重町松尾山を本陣として大友氏を制圧したが、豊臣秀吉の大軍に圧迫されて、翌年三月恨をのみ旗を巻いてこの峠から日向に落ちた。

近く明治十年夏、三州（日向大隈・薩摩）の隼人は、大旆を押し立て「君側を清めん」と叫びつつ衝天の意気で、この峠を越えて侵入したが、又時に利あらず、勝てば官軍、負くれば賊の恨を吟んで、この峠から日向路に敗退した。

以上の様に、雄図を抱いた薩軍は、二度この峠を越えたが、両度共血涙をのんでこの峠から敗退した。三国峠は薩州の隼人にとつて―恨みの峠―となつたのである。

◇赤　い　褌

大正八年頃のわたしは、老父（有田孫七）を市場一区の旧宅に残して小野市の木地屋に下宿していた。その頃は、またバスが通つてなかつたので、いやでも応でも三国峠の旧道を通らねばならなかつた。郡役所に用事のある時は、公的の出張であつたから、峠の頂上で中食をするようにゆつくりと風光を楽しんで越した。若草の頃もよかつたし入

道雲の雄大に真向つて越す豪快も忘れらない。増して錦繡の頃、道ばたの千草まで深い紅葉となる頃は、多感時代であつたから深刻な印象を受けた。大正十年の秋突如朝鮮に去つた。以来、この峠は郷愁の対象となつてわたしから放せない我物の感をもつ峠となつた。

わたしの踏んだ峠路は、バスの通つている今の路線ではないワラジの紐をしめ直ししめ直し冬でも汗を拭いつつ、越した旧道である。その峠路は、昔むかしの風土記に出る処の三重市と小野市とを結ぶ駅路で、山の尾根から尾根を伝つて行く嶮岨であつた。

その頃、山田宗賢の墓の下手に、一寸した広場があつて、そこに茶屋があつた。茶屋の前に梨の花が咲いていたが、今も老木となつて残つている。わたしたちは峠茶屋と言つた。

峠にたどりつくと、この茶屋で駄菓子を摘んだり、ワラジの緒をしめ直ししたりした。峠を越す回数が重なると、店のおばばとも顔なじみとなつた事も懐しい想出である。—ようウグイスがなきますのに今日は未だ来ません—草枕のおばばのようなことを言つてくれたこともあつた。今の梨のある辺に腰掛があつた。

脚下には奥畑の小木浦が沈み眼前には紫紺の傾連峰が拡がり祖母・阿蘇が右に続く大観望に対して、茶をすすつた。

この店の前から、三国神社はまる見えであつた。松杉も二尺前後であつて数も少なかつた。小さな石の祠で—神社—とは言つてなかつた

六二

同行の板倉司慶氏（旧千才村長・当時は小野市小学校に勤めていた人が

「三国の神様には赤い旗が上つているが、お稲荷様の親類じやろうか」

「何んか、あんた、あれは兵隊よけの御願をかけに来た人たちがあげた旗じや、夕方こつそり、朝方こつそりと来て、兵隊にとられんように御願をかけて、神様に赤飯を供え、赤い褌にしかえて、遁げるように峠を下ります。ようげんがあるそうです」

朝鮮から引上げてから、ほんとに久々この峠を踏む機会があつた。松も杉も見上げる程大木となつていたが、もう赤い旗は見えなかつた思えば三十数年の年月は流れ去つていた。

この三国様に、なぜ赤い旗、赤い褌・赤飯と赤い色がからむのであろうか。わたしの子供の頃に—薩州赤ざや・赤べこさん—と言うはやし言葉があつた。この峠の戦は、丁度六月の半であつた。

当時の記録を見ると、薩州兵は赤裸に赤い褌をしめこみ、赤ざやの兵が多かつたとある。どんな意味づけによつて徴兵のがれの信仰となつたのであろうか。兎に角、この峠で死の決闘が行なわれ、血涙を綾つた物語がしみついているのである。この秋の紅葉は一段と深い紅であるように感ずる。

（昭和三十一年十一月一日）